

書評

Donald A. Landes

Merleau-Ponty and the Paradoxes of Expression

Bloomsbury, 2013, 224 pp.

三宅 萌*

1. 初めに

本書『メルロ=ポンティと表現のパラドックス』は、現象学・哲学の研究者であるドナルド・ランデス（1980-）の主著である。本書においてランデスは、メルロ=ポンティ（1908-1961）の最初期の論考から最晩年の『見えるものと見えないもの』や講義録、政治的テキストに至るまで、生涯一貫して「表現」概念が作動していることを明らかにした。即ち著者は、1950年代に展開され、およそ言語・芸術の分野においてのみ重要視されてきた一主題としての「表現」が、メルロ=ポンティ哲学の根幹をなし、かつ通底する論理であることを示したのである⁽¹⁾。

本書においてランデスは、「表現」の論理がテキスト内で反省によって明らかにされたもののみならず、哲学的反省の道筋においても機能していることを提示する。この時、メルロ=ポンティの弟子であったジルベール・シモンドン（1924-1989）やジャン=リュック・ナンシー（1940-）らの概念を取り上げることで、メルロ=ポンティの思想における表現の論理を規定すると共に、それが今日の現代哲学の関心に応えるものであることを示している。

本書の筆者ランデスは、2010年にニューヨークのストーニー・ブルック大学で博士号を取得し、現在はケベック州のラヴェル大学で哲学の准教授の職についている。出版時は33歳で若手とも呼べる年齢だったが、本書は2014年にエドワード・ゴッドウィン・バラード賞を現象学先端研究センターより受賞するなど高い評価を受けている。そのほか、『知覚の現象学』の新英訳（Maurice Merleau-Ponty. *Phenomenology of Perception*. Translated by Donald A. Landes. Routledge. 2012.）を出版し、次いで『メルロ=ポンティ辞

* 大阪大学大学院人間科学研究科共生学系 博士前期課程一年

典』(*The Merleau-Ponty Dictionary*. Bloomsbury. 2013.)を上梓するなど、現在英語圏で最も注目される気鋭のメルロ=ポンティ研究者の一人であると言えよう。

本書は序論と結論を含む全八部から構成される。以下では各章の内容を概観した後、特にナンシーの「〈外記〉(L'Excrit)」の議論を紹介することでランダスの「表現のパラドックス」という読み筋を評価する。以下、『メルロ=ポンティと表現のパラドックス』から引用する場合は頁数を丸括弧内の数字として示すこととする。

2. 本書の構成——表現という論理

各章の内容に踏み込む前に、ランダスがメルロ=ポンティ哲学から取り出すところの表現とは何かについて確認しておこう。

メルロ=ポンティによれば「一切の知覚、知覚を前提とする一切の行為、即ち身体の人間的な使用の一切は、既に原始的な表現なのであ」⁽²⁾り、そこからランダスは、「表現とは過去の、理念の、そして現在の状況の重み(weight)への持続的な応答として広く解釈されるべきものであり、[.....]常に、純粋な反復と純粋な創造の間に存在する諸実行(performances)の軌道を立ち上げる、受肉した行為として経験される」⁽¹⁰⁾ものだとする。それは、「準安定的平衡の軌道(trajjectory)」——均衡と不均衡のあわいの均衡状態である準安定的な平衡として実現される諸段階——として機能している。即ち表現とは、過去になされた思考や身体的身振りの沈殿、現在の状況などを伴って作り出される相対的な平衡状態と呼ぶべきものであり、それゆえ「純粋な反復と純粋な創造の間に」位置付け得るものなのである。

再びメルロ=ポンティを引こう。彼によれば「表現以前には曖昧な熟しか存在しないのであって、為されまた理解された作品のみが、そこで無というよりは発見すべき何かを立証する」⁽³⁾のだが、総じてランダスは、この表現以前から表現への移行を理論化することに努めていると述べることができるだろう。

それでは、本書全体の構成を一望するために各章を概括しよう。

序論「表現の逆説的論理」では、第一章以降で具体的なテキストに適用される「表現」の論理を、シモンドンの準安定的平衡やナンシーの内記／外記といった概念を導入しながら概観する。

第一章「制度化に抗して：表現の論理の初期の暗示」では、「キリスト教とルサンチマン」といったメルロ＝ポンティ最初期の論文に、既に「生きられた経験の持つパラドックス」を読み込み得ることが示される。その根底には身体／精神、主観／客観、一人称／三人称といった哲学的問題に対し非デカルト主義的に応答するという目的があったことは疑い得ず、晩年の『眼と精神』に至るまでメルロ＝ポンティのデカルトへの抗戦は繰り返し行われるのである。

第二章「表現と『行動の構造』」では、身体／精神の二元論を機械的因果主義と超越論的思考の二方向から検討する『行動の構造』の解題を行う。『行動の構造』においてメルロ＝ポンティの思索の足掛かりとなるのは動物の行動であるが、それが物でも理念でもなく表現と呼ぶべきものであることを論証する。即ち行動とは動物の環境との関わりにおいて、言い換えれば環境の誘惑への応答として行われるものなのであり、ランダスはそこに語と概念の関係を読み込む。身体と精神との関係は、語と概念との関係のように、表現を呼び求め、表現において実現され、両者は意味的統一体として存在するのである。

第三章「表現と『知覚の現象学』」では、『知覚の現象学』における多様な分析の根底には「受肉＝具現化した経験の構造」(80)としての表現の論理が存在し、またその論理はテキスト自体の議論の展開に見出し得ることを示す。表現の論理は身体と精神、自由と決定論、語ることと語られたもの、創造と反復の間に存在し、その準安定的な構造において我々は経験を理解し得るのである。

第四章「表現の政治学」では、政治的著作について、そこでも表現の論理が中心的に作動することを論証する。メルロ＝ポンティの政治的テキストは、例えば「ヒューマニズムとテロル」という表題が暗示するように、その両者が結びつき「人間性と暴力との間に確固たる区別は存在し得ない」(109)ことを述べるものである。我々の行動が自らのみならず他者と関係するものである以上、我々の行動は避け難く他者に対し暴力的であるのだが、一方で

最も人間的な行動とは逆説的な構造であるところの責任＝応答可能性である。

第五章「沈黙の糸：描くこと、話すこと、書くこと」では、彼が政治学について探究していたのと殆ど同時期に著された言語論・絵画論へと対象を移す。上記の主題は政治や歴史への議論と共に深められたものである。描くこと、話すこと、書くことは単に何事かを表出 (*make public*) する営みではなく、歴史や身体といった重みを伴って実現されるのであり、ここに見出される物質性がそれらの表現を、書くという様態における伝達 (*communication*) にするのである。

第六章「[全ての文化の基礎]：絵画、存在論、解釈」では、ここまでメルロ＝ポンティの著作に見出されてきた表現の逆説的論理が、肉の存在論、そして可逆性といった後年の哲学的探究の原動力であることを示す。

結論では、本書の内容が概括されると共に、以上の議論が未公刊の講義録読解へも有用であることが示唆される。

3. 外記

さて、ランダスはシモンドンの概念の導入に際しては概念間の諸関係を丸一節を割いて紹介しているのに対し、ナンシーの内記／外記の議論については殆ど明確な規定なく導入されており、「外記」が本書全体の鍵概念であるにも関わらずごく簡潔な解説に留まっている。それは以下のような言及である。

意味を内記する (*inscribing*) という出来事において、ある関係の全体的なネットワークが外記される (*excribed*) が、そのネットワークは、内記という言葉、内記する身体の企図と欲望、内記を引き起こす世界と諸状況、内記の読者の身体や生活によって反省された意味、などを含む。(186)

ここでは「外記される」とは、何らかの書き込み (*inscribe*) という事態において、(内)記された意味のみならず書き手・読み手の心身や周囲の状況、個人的に蓄積された意味といった諸関係のネットワークが動員される＝「外記される」といった内容を指すと読める。しかしこの記述は外記概念そ

のものの直接の規定とは言い難いだろう。本書の書評 (Maclaren 2015) や、本書を邦語で紹介した論文 (田中 2018) も、ナンシーの外記概念そのものに踏み込むことなく論じるに留まっている。しかし、ランダスの「パラドックス」そのものに深く関わるこの外記という概念について、メルロ=ポンティの表現概念の思想的射程を考える上でも精緻な理解は必須であろう。そこで本節では、ナンシーの「〈外記〉 (L'Excrit)」というテキストに遡り、この概念について考えてみたい⁽⁴⁾。

「〈外記〉」は 1990 年に出版された『限りある思考』に収録されたバタイユ論であるが、ナンシーはそこでバタイユの注釈を行うのではなく、バタイユのテキストが「それに触れることなしには何事も伝達し得ないような限界」に触れていることから議論を始め、エクリチュールや共同体の可能性の条件としての「外記」について論じた⁽⁵⁾。

ナンシーはエクリチュールに通常の意味で書き込まれた、即ち内記 (inscrire) された意味作用の水準とは異なる、エクリチュールの内なる「外部」を指定する。その外部には、テキストにおいて問題となる一切があるのだが、しかしそれは指示対象の「外部」ではない。「外部」とは意味作用や具体的な指示対象の水準で語られ得る外部ではなく、「実存者の現前と不在を成立」させ得るある領域として指定される⁽⁶⁾。即ち、テキスト内に記された意味作用による現実的な指示対象と、エクリチュールが読者の前に現前させる「エクリチュール外部の」存在が区別されており、ここにエクリチュールの内記・外記の枠組みを見て取ることができる。

この領域は、「意味の場所そのものであるが意味を有さない」ものであり、かつ「可能的な全ての意味へ向けて呼び出すところ」の「存在が、存在しているということが、諸存在が——あるということ (Qu'ilya)」⁽⁷⁾であるとまで評価される。そしてここにこそ、「内記への開け」——即ち、前述したバタイユへの言及における「限界」があると言えるだろう。

この〔何事かを伝達しようとするときに触れるべき〕限界にあっては、意味の全体が「意味」という語からはみ出し、自分自身の外へと広がっていく。意味のこのような横溢 (renversement) が意味を成すのだが、こうした意味の横溢もしくは、それ自身のエクリチュールの起源の不明さへの意味のこの横溢、

これを私は外記と呼ぶ⁽⁸⁾。

議論をまとめよう。外記とはエクリチュールが、エクリチュール自身の意味を成立させる外部へと溢れ出すことである。その外部とは更に、エクリチュールによって現前するところの存在や実存者の領域でもある。エクリチュールにおいて問題となるような言外の領域に正にエクリチュールにおいて触れ、そこで内記の意味さえも成り立たせるような、エクリチュールの意味の「不分明な」、あるいはパラドキシカルな論理を、この外記の議論から読み出すことができるだろう。

ここでランダスの議論に立ち戻ろう。「発話は [.....] 言語を外記するのであり、これこそメルロ＝ポンティが決して身振りや生きられた経験の強調を取りやめなかったことの原因である」(133)⁽⁹⁾あるいは「発話経験における言語構造の地位を探究することで、メルロ＝ポンティは言語が準安定的なものとして、動的平衡として存在することを発見するのだが、そのようなものとしての言語は各々の表現的発話によって維持され、推し進められ、また再形成されるものであり、それゆえ言語は一切の表現を超越し、逆説的に、一切の表現が応答するものなのである」(127)⁽¹⁰⁾といった記述に見出されるように、ランダスは具体的な諸表現を成立させ、かつそれらが向かう外部を「言語」と定めている。これは、諸表現が溢れ出す外部を、諸発話を成り立たせるところの言語体系に限定しているかのように読み取れる。

しかし本節で確認したように、ナンシーにおける外部とはそれが意味の源泉であり、かつ我々の実存、存在そのものを現前させるという性質を担うものである。ランダスの論じる表現のパラドックスとは、「表現を成り立たせるものに表現が作用する」という逆説的構造を指すものであり、人間の知覚や行動さえも「表現」と見る立場においてこのパラドックス性を打ち出した本書は非常に意義深い論点を示しているのだが、しかしそこでの「表現の外部」には、人間的制度である「言語」以前の水準を、パラドキシカルな仕方と呼び起こしていると読み得るのではないだろうか。例えばメルロ＝ポンティが「言葉とは我々の実存が自然的存在を超過しているその余剰部分である。けれども、表現行為が言語的世界と文化的世界とを構成するのであって、表現行為は、彼岸へと向かっていたものを、再び存在へと突き戻す。

「……」自分自身を超えた彼方へと自分を投げ出していく、そうした作用なのである」⁽¹⁾と述べる時、ここには正にランダスが論じる以上にナンシー的な「外記」の作用を見て取ることができると言えるだろう。

4. 終わりに

本書は、中後期の言語・芸術論において重視されてきた「表現」概念が知覚や行動、歴史、絵画、肉といった概念を含むメルロ＝ポンティ哲学を貫く論理であることを指摘し、そこに逆説的な構造を見出すものであった。その逆説性は、シモンドンの準安定的構造やナンシーの外記といった概念を導入することで明確化される。「表現」概念を現代の哲学者との往還において捉え、そこにパラドックスを見出すランダスの議論は、メルロ＝ポンティ研究のみならず現代思想にとっても意義深いものであると評価できるだろう。

しかし、ナンシーを導入するにおけるランダスの議論には、ラング／パロールといったある種の言語学的議論のバイアスがかかっているように見受けられる。メルロ＝ポンティのテキスト、また表現の論理には、ランダスの解釈以上にナンシーの議論に近接する「外部」を見出すことが可能なのではないだろうか。

注

- (1) メルロ＝ポンティの思想を「表現」という観点から論じた先行研究としては、Barbaras, Renaud. 1991. *De l'être du phénomène: sur l'ontologie de Merleau-Ponty*, Grenoble. などが挙げられる。
- (2) Merleau-Ponty. 1960. *Signes*. Galimard. pp.66-67. なお、引用元 «Le langage indirect et les voix du silence» の初出は 1952 年の *Les Temps Modernes* 誌。
- (3) Merleau-Ponty. 1966. *Sens et non-sens*. Nagel. p.26. なお、引用元 'Le doute de Cézanne' の初出は 1945 年の *Fontaine* 誌。
- (4) ここで用いられる「外記」という訳語は、ジャン＝リュック・ナンシー『限りある思考』（合田正人訳、法政大学出版局、2011 年）に依る。また、日本語への訳出において参考にした。

- (5) オリジナルのテキストは雑誌 *Po&sie* の1988年47号に掲載されたが、『限りある思考』に収録された版にはオリジナルのテキストとはかなりの異同が認められる。例えば *Po&sie* 版で「書くことの諸理由」「読むことの諸理由」の二部構成だった15頁のテキストは、『限りある思考』版では一部構成で8頁のテキストへと大幅に修正されている。
- (6) この領域は「空虚な自由 (liberté vide)」とも呼ばれる。(cf. Nancy 1990: 61)
- (7) Ibid. p.62
- (8) Ibid. p.55
- (9) 下線部強調は評者。
- (10) 下線部強調は評者。
- (11) Merleau-Ponty 1945: 229-230.

参考文献

- Barbaras, Renaud. 1991. *De l'être du phénomène: sur l'ontologie de Merleau-Ponty*, Grenoble.
- Nancy, Jean-Luc. 1990. *Une pensée finie*. Paris: Galilée.
- Maclaren, Kym. 2015. *Philosophical Review*, an electronic journal, University of Notre Dame (<https://ndpr.nd.edu/news/merleau-ponty-and-the-paradoxes-of-expression/> 【最終閲覧日: 2020年9月29日】)
- Merleau-Ponty, Maurice. 1945. *Phénoménologie de la perception*. Paris: Gallimard.
- 1960. *Signes*. Galimard.
- 1964. *Le visible et l'invisible*. publié par Cl. Lefort. Paris: Gallimard.
- 1966 [1948] . *Sens et Non-sens*. Paris: Nagel.
- 田中 雄祐 2018 「メルロ＝ポンティの哲学に断絶はあるのか? : メルロ＝ポンティの表現論研究の比較検討」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』46:93-105。
- ナンシー、ジャン＝リュック 2011 『限りある思考』合田正人訳、法政大学出版局。